

厚木・伊勢原・秦野の古墳調査（２）

－近年の調査事例と周辺の古墳について－

古墳時代研究プロジェクトチーム

厚木・伊勢原・秦野市域では、以前から古墳時代後期の群集墳を中心に多くの古墳の調査が行われてきた。さらに近年は新東名高速道路、一般国道246号（厚木秦野道路）建設に伴い、本財団が実施した発掘調査などによって、新たな調査例が増加している（第1図）。そこでこれら3地域における新たな古墳、横穴墓および周辺の古墳、横穴墓の様相について概観し、関係性などを探る初端としたい。研究紀要28では厚木市域として中依知地区周辺における後期古墳の石室構造を概観するとともに、伊勢原市域の後期古墳を概観した。本稿では秦野市域について触れることとする。なお、新たに調査された古墳・横穴墓の名称・号数などは現段階で公表されている資料に基づく。

秦野市域の古墳

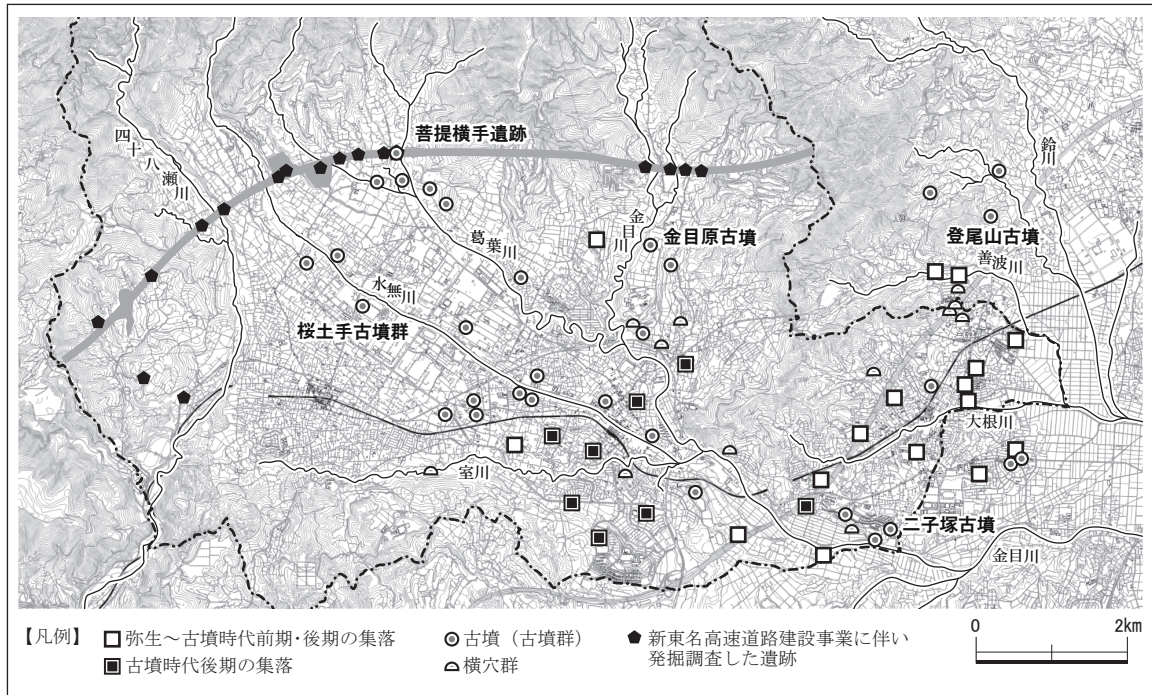
1. 秦野市域の古墳について

秦野市では近年、新東名高速道路建設事業に伴う発掘調査が数多く実施されてきた。本稿では平成28・29年度、令和2年度に5基の古墳が発掘調査された菩提横手遺跡を中心に、葛葉川流域における古墳を概観していくこととする。

新東名高速道路建設事業に伴う発掘調査が実施された地域の大半は秦野市域の北・西部に位置し、丹沢山地から延びる丘陵部に立地している（第2図）。こうした地域は過去に大規模発掘調査事例が少ない地域であったことに加え、一つ一つの調査対象範囲が広範囲に及ぶものが多かった。このため、これらの調査によって秦野市域における旧石器時代～近世の数多くの遺跡が新たに確認されたが、一方で古墳時代の遺構が確認



第1図 本財団の近年の古墳調査実施遺跡と周辺古墳



第2図 秦野市域の古墳時代集落と古墳群・横穴墓群（大上1994をもとに追記）

された遺跡は菩提横手遺跡のみである。

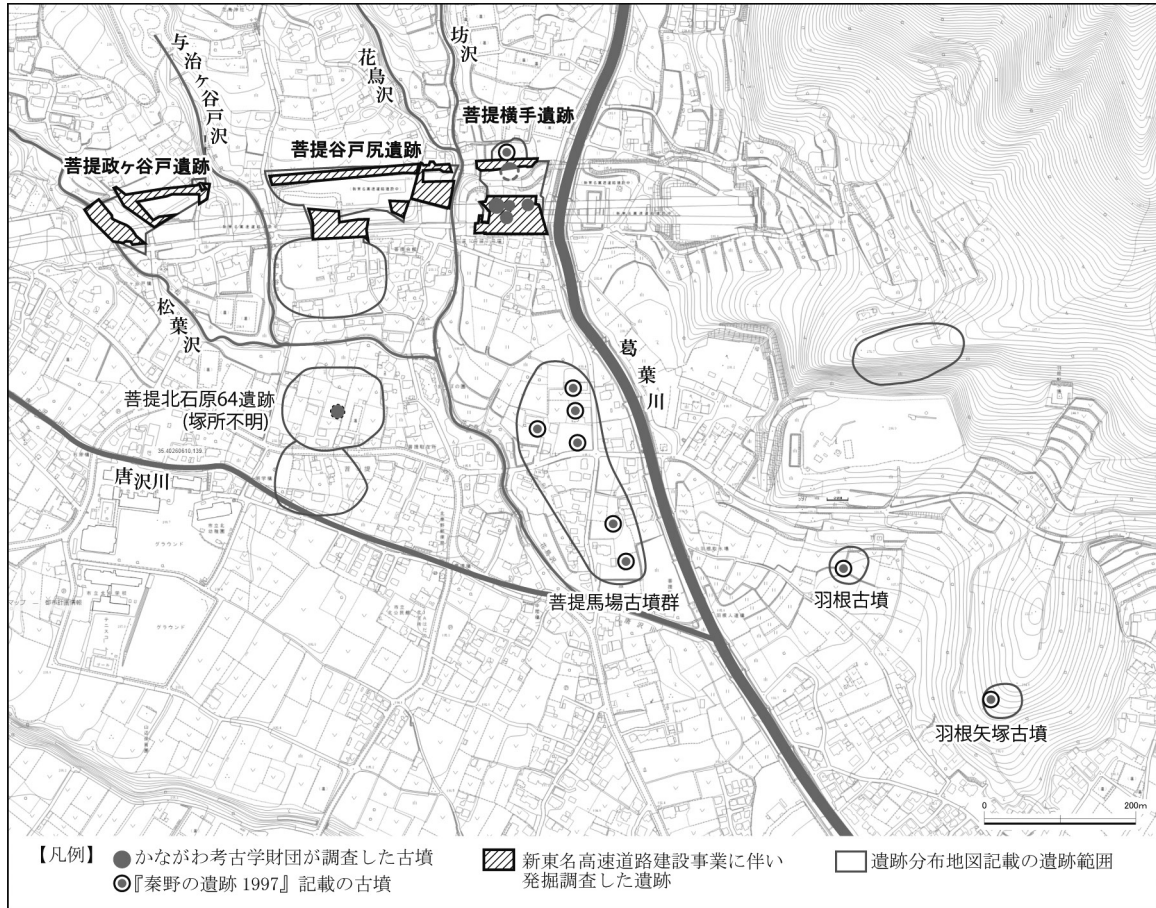
秦野市域の地形を見ると、その大半を神奈川県内唯一の盆地地形である秦野盆地が占めている。秦野盆地の北・西側には丹沢山塊が連なり、南側には渋沢丘陵が東西に伸びている。盆地内は水無川、四十八瀬川、金目川、葛葉川などの河川が複雑に開析することで複合扇状地が形成されている。また、盆地南東端部（秦野市城南東部）に位置する大根地域は北金目台地・鶴巻台地からなる台地形であり、相模平野の北西部に突出する舌状台地となっている。

大上周三氏は秦野市域の古代集落の分布状況について、大根地域では台地上に偏りなく集落が分布する一方で、盆地内では扇状地の扇端部・丘陵上には顕著に集落が認められるものの、各河川上流域の扇頂部には集落が少ない傾向を指摘している（大上1994）。また、大根地域では弥生時代前期という早い段階から集落がみられるが、盆地地域における集落の本格的な開始時期は古墳時代後期段階からであることを指摘しながら、具体的資料を欠く盆地西半の扇頂部でも同様の状況であることを推測されている。新東名高速道路建設事業に伴う発掘調査が実施された地域は盆地内でも後者に該当することから、その関連調査において古墳時代の遺構が確認されなかったことは、その推測を補強していると考えられる。

2. 葛葉川沿いの後期古墳について

秦野市域の古墳時代集落は、市城南東部の大根地域では五領期・和泉期の遺跡が見られるのに対し、盆地内ではその出現を古墳時代後期段階とみることが出来る。これは古墳でも同様であり、大根地域には比々多遺跡群上坂東6号墳のように4世紀代まで遡る古墳時前期の古墳も存在するが、主要な造営年代は6世紀～8世紀代であると考えられ、菩提横手遺跡の古墳もこれに含まれる。

秦野市域における古墳の墳丘形態の主体は円墳であり、秦野市下大根に位置する二子塚古墳だけが前方後円墳である。盆地内の水無川中流域右岸に位置する桜土手古墳群のような大規模な古墳群も存在するが、こ

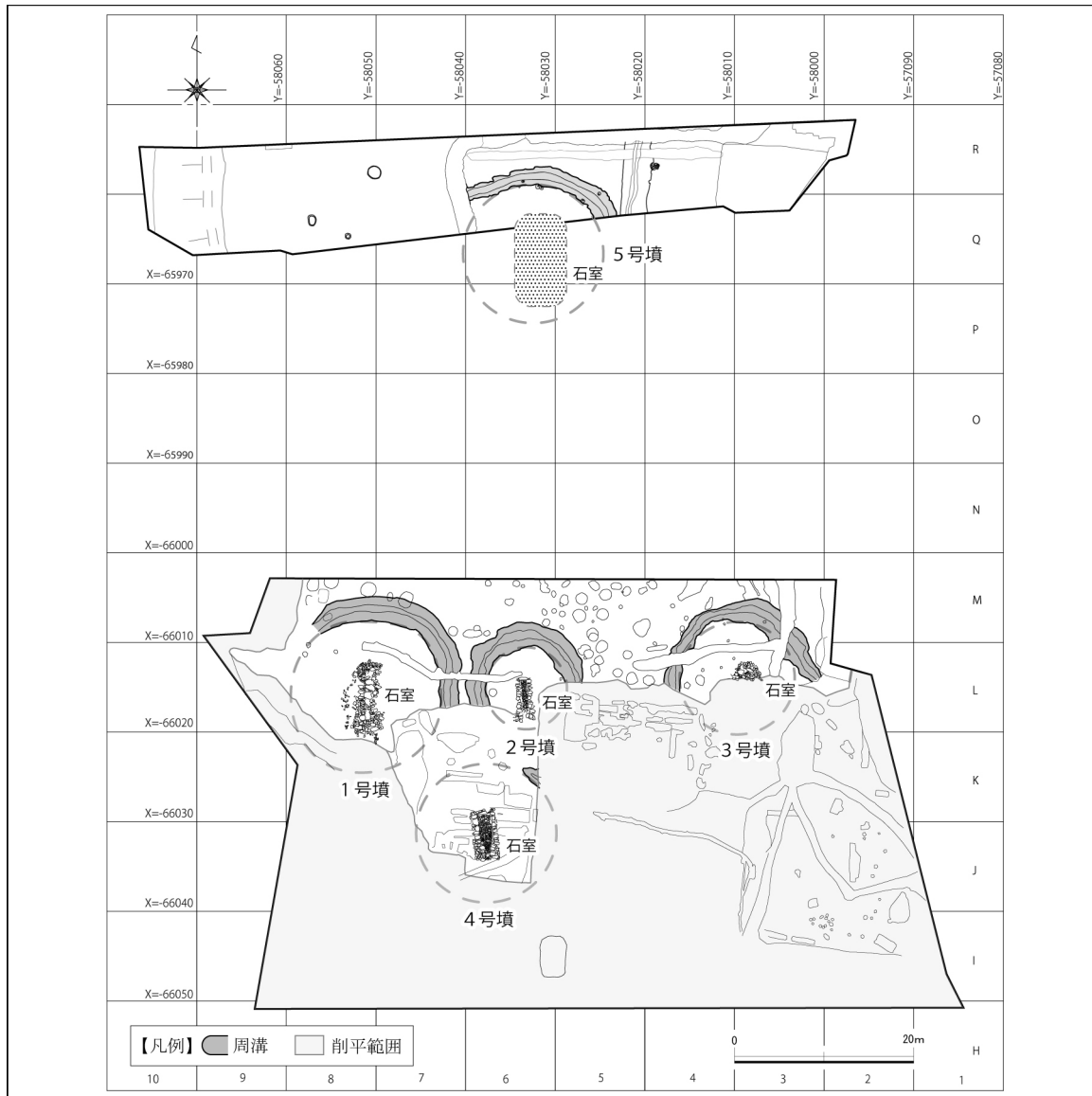


第3図 菩提・羽根地区の古墳（群）

これらの古墳の多くは1～20基ほどで構成される小規模な古墳群である。こうした秦野市域の古墳（群）は、水無川・葛葉川・金目川・大根川流域の丘陵縁辺部や丘陵斜面と沖積平地に築かれ、横穴墓群は市域の東南部に偏っていることが指摘されている（秦野市1990）。

菩提横手遺跡が所在する菩提地区は秦野盆地北縁の丹沢山地の麓に位置し、同地区を源流とする葛葉川流域に立地する。葛葉川は秦野盆地のほぼ中央を蛇行して南東方向へと流れ、金目川に合流する。葛葉川上流域に位置する古墳群としては、羽根古墳群と菩提馬場古墳群があり、後者は菩提横手遺跡と同じく葛葉川右岸の台地上に立地する（第3図）。「秦野の遺跡1997」では菩提馬場古墳群は6基の古墳からなり、現在は畑地の中に複数の墳丘が確認される。「秦野市史 通史1」（秦野市1990）によれば、その北西約200mに位置する菩提北石原64には古墳1基が存在するとされるが、「秦野の遺跡1997」では塚所不明となっている。これらの古墳群と川を挟んだ反対側、葛葉川左岸には羽根古墳群が確認されている。この古墳群は羽根字山崎に位置する羽根古墳（古墳1基）と羽根字矢塚に位置する羽根矢塚遺跡（古墳1基）が確認されており、さらに東側の西田原鳥居原遺跡でも古墳が認められているとされる（秦野市1990・1997）。「秦野市史 別巻 考古編」（秦野市1985）の「羽根古墳群」の項において、森照吉氏の「北秦野村字羽根の石櫛古墳発掘調査」より、羽根古墳の石室が横穴式で、玄室には礫を石畳上に敷き、その下に小砂利が敷かれていたこと、直刀、鉄鏃等の他、頭蓋骨片が出土したことが紹介されている。

菩提横手遺跡では5基の古墳が調査された（公益財団法人かながわ考古学財団2018・2022、三瓶2017、高



第4図 菩提横手遺跡 古墳配置図

橋2021) (第4図)。このうちH1～4号墳については石室を調査し、H5号墳は周溝の一部だけが調査された。いずれも墳丘形態は円墳で、周溝から推定される直径は9～17mを測る。H1～4号墳の石室は河原石積横穴式石室で、南側に開口していたと考えられるが、後世の段切りや宅地造成によって墳丘は削平され、H3号墳は石室の大部分が破壊された状態で検出された (写真1)。

H1号墳は直径16.4m、周溝の幅は2.5mを測り、5基の中では最も大きいと考えられる。石室形態は無袖式横穴式石室で、規模は残存長6.7m、幅1.1mを測り、一部の天井石が残存していた (写真2)。出土遺物は須恵器横瓶、須恵器提瓶、直刀、鉄鏃、切子玉、ガラス玉、管玉、小玉などが出土している。H2号墳は直径8.8m、周溝の幅は2.7mを測り、5基の中では最小の古墳である。石室は無袖式横穴式石室で、規模は残存3.0m、幅0.7m、玄室の残存する壁高は0.8mを測る (写真3)。出土遺物は土師器碗、直刀、刀子、鉄鏃が出土したほか、人骨の一部が残存していた。H3号墳は直径12.2m、周溝の幅2.7mを測る。石室は後世の段切りに破壊されているため非常に低く、奥壁付近のみが検出された (写真4)。石室の構造は不明だが、



写真1 菩提横手遺跡 H1～3号墳（南西から）

残存部の規模は長さ1.5m、幅0.85mを測る。出土遺物は須恵器片のほか、刀子、鉄鏃、管玉、ガラス小玉が出土した。H4号墳は後世の造成により残存状況が悪く、検出時には石室が露出し、中世以降の五輪塔なども混じる積石塚と認識されていた。周溝も墳丘北西部のごく一部のみが残存するだけで、大部分は削平されていた。古墳の規模は推定直径14.0mを測り、石室は両袖式横穴石室で、他の3基の古墳とは異なる（写真6）。石室の規模は残存長5.0m、玄室部長3.4m、奥壁幅1.5mを測り、羨門幅は0.6mを測る。出土遺物は人骨のほか、刀子、鉄鏃、管玉、ガラス玉・小玉など玉類が見つかった。H5号墳はH1～4号墳の北側約30mに位置する。墳丘は石が積まれた高まりとなっており、「頼政大明神」の記銘のある石塔類や、鳥居の基礎部分などが確認され、近世～現代までは信仰対象の塚として使われたと考えられる。墳丘北側部分が令和2年度の発掘調査範囲に含まれ、周溝の約半分が調査されたことから古墳であることが判明したものである。周溝は半円状に検出され、幅2.5m、深さ0.35～0.55mを測り、その西側は後世の遺構に削平されている（写真5）。周溝からは土師器が数点出土した他、覆土上層から袋状鉄斧が出土したが、これは奈良・平安時代のもと考えられる。上記の通り、調査範囲南側に主体部と考えられる石積みが露出しているが、高速道路建設工事の影響を受けないと判断されたため掘削はせず、現状を記録した後に盛り土・被覆等を行うことで保護された。『秦野の遺跡1997』によれば菩提横手遺跡にはH5号墳の北側隣接地にも1基の古墳が存在すると考えられている（秦野市教育委員会 1997）。これを含めるとこの古墳群は6基以上の古墳で構成されていることになり、現状で確認されている構成数としては南側に近接する菩提馬場古墳群とほぼ同規模ということになる。

3. まとめ

葛葉川上流域に位置する秦野市菩提・羽根両地区の古墳・塚は住宅隣接地や畑地に位置しており、その多くは墳丘が削平された状態で確認されている。菩提横手遺跡で調査された5基の古墳も同様で、墳丘や石室が後世の段切りや宅地造成により壊されており、うち3基はこの調査で新たに発見されたものである。石室を調査したH1～4号墳については、いずれも石室から多様な遺物や人骨を確認することができ、同地域だけでなく秦野市域全体でも本格的な調査を実施できた古墳として貴重な事例と言える。新東名高速道路建設事業に伴う発掘調査では、菩提横手遺跡の西方に近接する菩提谷戸尻遺跡、菩提政ヶ谷戸遺跡でも発掘調査が実施されたが、古墳時代の遺構は確認されなかった。先に述べたように、そのほかの新東名高速道路建設事業関連の発掘調査成果を見ても、金目川、唐沢川（葛葉川支流）、水無川、四十八瀬川上流域に立地する遺跡の調査では古墳時代の遺構を確認した事例はなかった。こうした状況は盆地内の古墳時代後期の集落は河川上流域の扇頂部には少ない、という大上氏の指摘（大上1994）を補強することとなった。大上氏は秦野盆地周辺の集落や古墳をまとめられ、5～6世紀に大根地域に基盤を有した有力在地首長の主導性と朝鮮半島からの農具・技術導入とによって6世紀後半以降に盆地地域への入植・開拓が進み、その主体は一般成員とそこから成長した有力成員であると考えられた。そして、大規模古墳群である桜土手古墳群が居住域から離れて立地している点について、伝統的な存在基盤を持たない新興の有力成員の墓域が、居住域・農耕地には不向きでも墳墓造営資材が得やすく、盆地地域の集落から臨みうる水無川中流域に設定されたためではないか、とされている（大上 前掲）。菩提横手遺跡の周辺に集落が実際に存在したか否かについては今後の周辺地域の調査によって変わる可能性もあるが、現状では菩提横手遺跡の古墳の造営集団についても盆地地域の同時期集落や周辺の古墳との関係を検討する必要がある。

一方で、桜土手古墳群とは異なると考えられる点も確認されている。調査者によれば、菩提横手遺跡の古墳の造営時期については今後の整理作業を待つ必要があるとしつつ、出土した須恵器の年代観からはH1～3号墳を桜土手古墳群より若干古いとする指摘があるとしている（公益財団法人かながわ考古学財団2019）。また、菩提横手遺跡でも唯一ではあるが、H4号墳の石室形態が両袖式である点も、無袖式横穴式石室主体である桜土手古墳群とは異なる。

秦野市域で確認された両袖式横穴式石室としては、金目川西岸に立地する金目原古墳1号墳（秦野市教委1995）に続き2例目である。さらに、相模においても伊勢原市登尾山古墳と合わせ3例目であり、この地域の円墳の石室形態としては特異であると言える。宍戸信悟氏は秦野市域の古墳石室をまとめられた際、近在の桜土手古墳群とは異なり、金目原古墳群が両袖式横穴式石室を導入した背景について、北関東の毛野地域からの波及や畿内系石室の影響といった要因を想定しつつ、可能性の1つとして2つの古墳群が金目川と水無川という別の水系に立地している点を挙げられている（宍戸2001）。

菩提横手遺跡の古墳については、出土遺物、石室構造などの検証を通して考察されるべきだが、両袖式横穴式石室の観点から金目原古墳群などの金目川上・中流域の古墳との関係については検討する必要がある。秦野市域で調査された古墳の事例としても貴重であることから、市域の古墳群、集落の考察についても今後の整理作業が待たれる。（吉澤）



写真2 菩提横手遺跡 H1号墳（南から）



写真4 菩提横手遺跡 H3号墳（南から）



写真3 菩提横手遺跡 H2号墳（南から）



写真5 菩提横手遺跡 H5号墳（南から）



写真6 菩提横手遺跡 H4号墳（南から）

【引用・参考文献】

- 大上周三 1994「集落・墳墓分布における秦野市の古代社会」『神奈川考古』第30号
- 公益財団法人かながわ考古学財団 2017『菩提横手遺跡』平成29年度現地見学会資料
- 公益財団法人かながわ考古学財団 2018『年報』24 平成28年度
- 公益財団法人かながわ考古学財団 2019『年報』25 平成29年度
- 公益財団法人かながわ考古学財団 2022『年報』28 令和2年度
- 穴戸信悟 2001「横穴式石室から見た古墳時代の秦野盆地」『秦野市立桜土手古墳展示館研究紀要』第2号
- 関根孝夫 2001「桜土手古墳群の構成とその性格」『秦野市立桜土手古墳展示館研究紀要』第2号
- 高橋香 2021『菩提横手遺跡発掘調査概報』公益財団法人かながわ考古学財団
- 秦野市 1985『秦野市史 別巻 考古編』
- 秦野市 1990『秦野市史 通史1 総説・原子・古代・中世』
- 秦野市教育委員会 1995「秦野市金目原古墳群」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』37
- 秦野市教育委員会 1997「秦野の遺跡1997」『秦野市文化財調査報告書』1
- 三瓶裕司 2017『菩提谷戸尻遺跡（第1・2地点）・菩提横手遺跡発掘調査概報』公益財団法人かながわ考古学財団
- 三瓶裕司 2018『菩提政ヶ谷戸遺跡・菩提谷戸尻遺跡・菩提横手遺跡発掘調査概報』公益財団法人かながわ考古学財団
- 吉田章一郎 2000「桜土手古墳群考」『秦野市立桜土手古墳展示館研究紀要』第1号

【図版出典等】

- 第1図 古墳時代プロジェクト作成
- 第2図 大上周三 1994「集落・墳墓分布における秦野市の古代社会」『神奈川考古』第30号より作成
位置図を作成・一部遺跡加筆
- 第3図 吉澤作成
- 第4図 2018・2021『菩提横手遺跡発掘調査概報』公益財団法人かながわ考古学財団
古墳時代遺構配置図を合成
- 写真1～5 2018『菩提横手遺跡発掘調査概報』公益財団法人かながわ考古学財団